

## 韓国キリスト教詩の世界

金元植編 キムウォンシク 『明洞のキリスト—韓国キリスト者三十九人集』 ミヨンドン

(一九九一年七月十五日、教文館刊行) を共訳して

森田 進

はじめに

第二回東北アジア基督教者文学会議は、一九八九年八月下旬に韓国の雪岳山の麓で開催された。日韓のキリスト教文学界の現状報告に力点が置かれたが、今後はもつと分野別に専門的な相互理解を深めたい、という結論を抱いたのであった。では、どの分野から始めるべきかという話しになったとき、たちどころに「詩」と決定した。なぜなら韓国側の会員の八〇%弱が詩人であり、韓国の文学界において、詩は依然として主流であり、詩は韓国人の魂ホソを震わせつづけているからである。当時会長であった金元植キムウォンシクから翻訳依頼の話しをもちかけられたとき、私は当惑してしまった。文学の翻訳はむづかしい。しかも詩となると、民族の魂ホソの表現であるからなおさらである。が、キリスト者が訳すのでなければ意味がないというので、承諾したのであった。さいわいなことに、当会議で同時通訳者として大活躍した日本近代文学研究者・曹紗玉チヨサオクという俊秀が共訳者として与えられたのであった。その結果、日本で最初の韓国キリスト教詩の翻訳という重責を担って、六二篇を選び出

し完訳するまで、その後の一年半が費やされた。日本人と韓国人との共同作業から学んだものは測り知れないが、今回の論点からそれるので省略する。

### 韓国キリスト教詩の森

今回、膨大な韓国キリスト教詩の森の中を探訪する機会を与えられたが、その豊かな宝石の数々に、ただただ圧倒されてしまった。アジアの中で、唯一例外的なプロテスタント王国（もちろんカトリックも多い）である韓国、ということは分かっていたが、文学状況もキリスト教と深く関わっているのである。日本の場合、山村暮鳥、八木重吉以来の流れはあるものの、キリスト教詩という文学概念を現時点で積極的に成立させるのは困難である。

韓国の場合、一九六五年に、『基督教詩壇』が発刊されて、詩によるキリスト教の土着化が意志的に志され、さらにキリスト教的な倫理と生命感を既成の文学界の中に打ち込むことも目指されている。

つまり、韓国キリスト教詩は、明確に伝道という使命をも帯びているのであり、それ故に牧師詩人も多い。そのせいか、日本のような文学の自律性と信仰との相克という視点は、あまり深刻な問題にはなっていない印象を抱いたのは事実である。

私が膨大な作品に接して抱いた印象は、

## 詩史的側面

一、韓国キリスト教詩は、韓国近代詩の歴史とほぼ重なっている。  
すぐれた近代詩人、たとえば鄭芝溶<sup>チヨンチヨン</sup>、朴木月<sup>パクモクウオル</sup>、柳致環<sup>ユチファン</sup>などは同時にキリスト者である。故に、かれらの作品には意識的、無意識的にキリスト教が濃厚に匂っている。

これは声なき叫喚

あの青い海原に向かつて振る

永遠のノスタルジアのハンカチ

「旗」より  
(柳致環<sup>ユチファン</sup>)

二、近代詩からモダニズム(現代詩)への転換を果した事実は大い。

植民地時代の暗黒期に輝いた唯一の星である尹東柱<sup>ユントンチュ</sup>は、キリスト教的倫理の高潔性に貫かれた抵抗詩人であると同時に、近代詩をモダニズムへと架橋した詩人である。鋭敏で高潔な倫理に支えられた文明批評に成功した尹東柱は、中学の教科書を通して、今や国民詩人であり、この事実が韓国人のキリスト教への信頼をさらに深めさせている。

死ぬ日まで天を仰ぎ

一点の恥なきことを、

「序詩」より  
(尹東柱<sup>ユントンチュ</sup>)

三、一九七〇年代以降に社会実践派傾向の詩人たちが登場。

一般的な日本人は、韓国には金芝河キムチハしか詩人がいないかのような印象をもっているが、梁性佑ヤンソング、文益煥ムンイクファン、鄭永植チヨンヨンシクなど、すぐれた詩人がたくさんいる。あくまでも信仰に強く立って、社会実践に関わり、そこから体制批判を展開している事実には深い感銘を抱かざるをえない。日本の場合、こういうキリスト教的社会詩人は現在ひとりもない。

### 日本キリスト教詩（？）との信仰内容の比較

#### 一、生理的肉体的信仰

言葉と民族性はもともと切り離せないが、韓国語は表現が生ままで激しい、つまり直接的である。これは信仰を匿名化することなく、堂々とストリートに表現するのうってつけである。とくに女性の場合には、きわめて生理的肉体的な表現が目立っている。たとえば、柳岸津ユアンチン、慎達子シンタルチヤ、朴松竹パクソンチユク、金小葉キムソヨなど。

あゝ 口惜しい

このぶざま

みすばらしさ

あなたは どうして

今やつと

わたしの前に見えてきたのか

青年キリスト

わたしの愛よ。

「青年キリストに」より  
(柳岸津)

二、懺悔と反省

信と不信との相克を描くことの少ない韓国詩は、不信ではなくて、神の前での懺悔や自省を深める。

水と霊により生まれ変わった後

わたしの日々は日ごとに新しい太陽なのだ！

数多い人々と騒がしい時代に

彼がただ私になさったことを伝えよう！

「もうひとつの天」より  
(鄭芝溶)

私また無力な彼と私との卑屈に対して死ぬほど身に滲みる憤怒と恐懼と自責に涙なみだで枕を濡らす

「エルサレムの鶏」より  
(柳致環)

その他としては、「み言葉」(朴貞姫)、  
「秋の果樹園にて」(朴根瑛)など。

## 三、信仰の愉悦と神との一体感

信の深さからくる愉悦と神との一体感もまた羨ましいほどの現実感にあふれている。

墓地といつても黄金の芝生 肥沃なので

まんまるい墓たち 寂しくない

「墓地頌」より

(朴斗鎮)

あの方はわたしのそばにいて私と共にいて

私と共に絶えることなく呼吸をなさる。

「序章」より

(林仁洙)

その他としては、「その方の声」

(ファンクムチヤン)

「地上の天国」

(キムキヨンス)

「言葉の海」

(チヨントツキ)

など。

## 四、霊性

もしかすると霊性こそが韓国キリスト教詩の最大の特徴かもしれない。魂(ホン)と霊(ヨン)と霊魂(ヨンホン)という単語がしばしば登場するのであるが、各々の厳密な区別ができずに、じつは翻訳するときに近いへん苦勞したのである。魂は日本人の考える魂(タマシイ)とはどうやら異なるらしく、むしろ霊に近いようである。各々は黒人霊歌のスピリットチャルなものに近いようである。日本プロテストメントの論理的、哲学的信仰が見失っている原初的で神秘的な、神との直接的な交感を霊性といったらよいのかもしれない。

いのちのいのちである  
私たちの靈魂の中には  
四季とともに育つ  
果樹園を生い茂らせ

「元旦の祈り」より  
(金南祚<sup>キムナムソク</sup>)

### 五、民族性、同胞性

日本以外のアジア諸国にとって「民族」という単語はいまなお積極的で重大なキーワードである。韓国キリスト教詩においても民族と同胞は、植民地時代からの扱って立つべき強固な根拠であり、主題でもある。現在、引き裂かれた民族であり同胞である韓国人にとって、統一への最大のエネルギーの一つがキリスト教である。

祖国よ 沈清<sup>シムチョン</sup>のように哀れなおまえだなあ。  
詩人がおまえの名前を呼ぼうとすると喉がつまる。

「焦土の詩・その十」より  
(具常<sup>クサン</sup>)

あの時 日本帝国主義の鎖を逃れようとして  
二千万がひとつ心だったじゃないか  
ひとつ心

そう ひとつ心で

お互いの祖先たちは唐の国の百万の大軍を退けたじゃないか

「たわごとじゃないたわごと」より (文益煥)

その他としては、「姉さん サハリンの姉さん」(金元植)、自由、おまえ 慕わしい名前」(金成栄) など。

## 六、風土性

韓国の風土の匂いを強く印象づける詩

力をこめて築いた垣の向こうに

青い蒼空が

わたしのしわ寄った額にまで

やって来てくっ付きそうに

秋が熟しています。

「秋の祈り」より (朴利道)

その他としては、「鳳仙花」「蘭」(梁東植)、望みの木」「この秋に」(李姓教)、ディアスポラ」(高静熙)、露の滴ひとつ」(崔銀河)、鶴の翼」(趙南基)、からす・その二」(具常) など。

## 七、イエスの内面への大胆な参入



四月の真昼がこんなに冷たいのか  
太陽の下にぐったりした体軀からだの中で火花がはぜ  
血が流れ皮膚に詩句を刻む。

ここ四月の風と花のある所に

私はいる

私は独りで私を刻む

「カルバリの刑座・そのⅠ」より  
(尹恵昇ミンヘスン)

八、信仰の実体への接近

時には美しい造花を刺繡しながら仰向けに倒れたあなたの残骸を探してうろつき疲れはてた舌先よ。

あゝ かしししゃべりちらす口もなく胸を打って生命いのちを呼ぶ。それは再び響きわたる永遠の余韻よ。

あなたは宇宙を覆ってあり余る陰。あなたの中で訴える血の声を聞くのよ。

「あなたに」より  
(高真淑コチンスク)

## 日本キリスト教詩との表現技術上の比較

## 一、直喩の多用

これは信仰の直接性にその第一の理由があるだろう。さらに読者との共感に近い次元で詩作しているためでもある。

## 二、聖句の本歌取り

聖書からの直接的取材が多い。苦難の歴史を生きてきた韓民族は、旧約新約全体を通して神を確認しているので、旧約に素材を求めた詩も当然多いのである。

おまえは四肢をねじる体のかたまり

この体のかたまりが

赤い果実に夢中になって

新しいもうひとつの喜びを試みていると

「アダムの後裔」より (趙南基)

その他としては、「ソドムの男」(李郷莪)、<sup>イヒヤンア</sup>「春の果樹園で」(崔奎彰) など。

## 三、直訴体

韓国キリスト教は旧約の預言書を重要視する。いかに厳しい状況の中に立たされても、歴史を導く神を信じ

ているので、希望と確信に満ちた詩がかけるのであろう。ということは審判する神への信頼ということだ。そこから神に対する直訴体の詩が生まれてくるのである。

神よ 一度いらしてもう愛に価しないものを取り除いてください

火に焼かれて炭の塊りにならせてください

神よ いらしてもう一度創造してください

ミサイルや大砲玉がマッチ軸のようなものと思いますか

急いでいらして蛇のいない園を造り治す刻ときです

「手紙」より (李炭イタン)

主よ、来てください。

満ち潮のように溢れる旗となって来てください

「ひごとに来てください」より (梁性佑ヤンソンウ)

その他としては、「シャロンの花」「草の葉が神さまに」(許炯萬ホヒョマン)など。

#### 四、超現実主義的イメージへの転奏

きわめて実感的素朴な信仰告白がある一方で、驚くほどの超現実主義的イメージの詩があるが、けして西洋のそれではなく、西脇順三郎的な遠いものの連結でもない。おそらく韓国人のイメージ喚起力が、跳躍力が、大きいのであろう。けして難解ではなく、いきいきとしたイメージで読者を容易に信仰的リアリティに引きず

りこんでしまうのである。

百合は泣かない。

機織りにたらたら汗を流す。

野原に寂しく一本立って苦勞する意味は——  
予想した通り木魚の音が耳にこそばゆい。

「この百合を見よ」より  
(石庸源)

いつのまにか燦然たる模様が

涙ぐましい音楽に変わり

その合間を縫って

天使たちがかくれんぼをしているが

「幻想舞」より  
(張壽哲)

その他としては、「仮面ごっこ」「車の墓場で」  
(李啓尙) など。

### 五、信仰の哲学的表現

私が触れている手先から

永遠の星たちは散らばって光を失うが、

私が触れている手先から  
私はむしろ私により近づいてくる

「絶対の孤独」より  
(金頭承<sup>キムヒョンスン</sup>)

### おわりに代えて

日本キリスト教詩が多分にもっている内向性、匿名性、間接性は、それなりの歴史的、状況的な理由を背景にもっているのであるが、飛行機でほんの二時間の向う側にある隣国が繰り展げる詩の光景とのあまりにも相違に、いまさらながら驚かざるをえない。が、日韓のキリスト教詩はたった今出会ったばかりである。この新鮮な出会いから、相互理解を深め、交流し、東アジアのキリスト教詩を共に創造していききたいと熱望する次第である。

### ◇追記

この論文は、第三回東北アジア基督者文学会議（早稲田奉仕園、一九九一年八月十六日～十九日）で発表したものに加筆したものである。